

太宰治「道化の華」論二

——佐藤春夫評「真実の蛍光」について——

宮崎 三世

一九三五（昭和十）年五月に、『日本浪漫派』に発表された「道化の華」は、第一回芥川龍之介賞候補に挙げられた作品であり、一九三六年六月に砂子屋書房から刊行された『晩年』に収録されたあと、一九三七年六月に新潮社から刊行された『虚構の彷徨 ダス・ゲマイネ』に収録された。一九三〇年十一月の鎌倉での作者の心中事件を素材としており、太宰にとつて思い入れの強い作品である。

「道化の華」について、これまで様々なことが述べられてきたが、それらの中で、同時代に書かれた佐藤春夫の評^①は抜きん出ており、このテクストを読む示唆に富んでいるように思われる。

（佐藤春夫氏、昭和十年初夏、著者と共通の友人、山岸外史に与へし親書。）

拝呈。

過刻は失礼。「道化の華」早速一読、甚だおもしろく存じ候。無論及第点をつけ申し候。「なにひとつ真実を言はぬ。けれども、しばらく聞いてゐるうちに思はぬ拾ひものをする」ことがある。彼

等の気取つた言葉のなかに、ときどきびつくりするほど素直なひびきの感ぜられることがある。」といふ篇中のキイノートをなす一節がそのままつし以てこの一篇の評語とすることが出来ると思ひます。ほのかにあはれなる真実の蛍光を発するを喜びます。恐らく真実といふものはかういふ風にしか語れないものでせうからね。病床の作者の自愛を析るあまり、慵齋主人、特に一書を呈す。何とぞおとりつぎ下さい。

（五月三十一日夜、否、六月一日朝。午前二時頃なるべし。）

佐藤春夫

山岸外史様

硯北

これは、もともとは佐藤春夫が山岸外史に宛てた手紙であり、その後太宰がこれを『晩年』初版本の帯とした。自らの作品の評価として適切であると感じたのであろう。

「道化の華」は、大庭葉蔵の物語と、それにその書き手の「僕」が

わり込む箇所から成るといえる。これまでに、後者に着目し、書き手がテクストに介入するとはどのようなことを考え、「道化の華」とは、「道化」である、書きつつある小説家「僕」についての小説であることを述べた⁽²⁾。本稿では、大庭葉蔵の物語について、佐藤春夫の評を手がかりとして、佐藤が促していると考えられる読み方にしたがって読み、「道化の華」の理解を深めたい。というのも、佐藤の評は、今日あまり取り上げられることはないが、初期の段階において、重要なことを述べていたと考えるからである。そして同時に、佐藤の評についても、とりわけ「真実の蛍光」について、その意味するところを明確にしたい。

一 「道化」である葉蔵と、葉蔵と対照的な真野

「道化の華」について、「甚だ面白く」「及第点をつけ」たと評価する佐藤春夫は、まず、次のことを指摘している。「なにひとつ真実を言はぬ。」に始まる一節が、「道化の華」の「キイノート」、すなわち、基調としてこの作品を作り上げている土台となっており、これを「そのまま」「この一篇の評語とすることが出来る」ということである。

この一節は、「道化」という言葉について述べたものだと考えられる。一般に、「道化」とは人を笑わせるようなおどけた言語や動作のことであり、また、それをする人間のことであるが、本作品においては、「道化」という言葉を新たに意味づけながら読まねばならないだろう。「道化」とは、なにひとつ真実を言っていないようにいても、しかしそこ

に「思はぬ拾ひもの」があったり、「びつくりするほど素直なびびき」が感じられたりすることが述べられている。つまり、「道化」というあり方こそが、かえって真実に触れ得ることを指摘したものであると考えられよう。

「道化」とは、とりわけ葉蔵のことであり、また葉蔵の友達である飛騨と小菅を加えた三人の青年たちのことである。作中において、三人は、思ひきり声をたてて笑ひ崩れた。彼等は、しばしばこのやうな道化を演ずる。」と書かれた箇所がある。そのような性質については、すでに「直面する問題が重要であればあるほど、本気で議論をせず、「ごまかし」や「はぐらかし」、あるいは「お互ひがいたはりたい心」によって韜晦する」⁽³⁾ことが中村三春によって指摘されているが、例えば、葉蔵は、心中という体験について次のように語る。

「あそこだよ。あの岩だよ。」

葉蔵は梨の木の枯枝のあひだからちらちら見える大きなひらたい岩を指さした。岩のくぼみにはところどころ、きのふの雪がのこつてゐた。

「あそこから、はねたのだ。」葉蔵は、おどけものらしく眼をくるくると丸くして言ふのである。

身を投げた岩を指さし、おどけて話す葉蔵について、この後「葉蔵も平気で言つてゐるのではなかつたが、しかしそれを不自然でなく言へるほどの技量をもつてゐたのである」と説明されている。葉蔵は、

たとえ心の中が「平気」ではなくても「おどけものらしく」語り、それを隠すことができるのである。また、葉蔵について、次のように書かれた箇所がある。

よい画がかけたらねえ、と言った。しかも笑つてそれを言つた。青年たちは、むきになつては、何も言へない。ことに本音を、笑ひでごまかす。

葉蔵は本当に思っていることは笑ひでごまかさないと云えないのである。深刻な出来事ですら、あるいは、深刻な出来事であるからこそ、茶化さずにはおられないという点が、本作品における「道化」の特徴である。

そのような「道化」の葉蔵の物語では、「葉蔵の病室から大勢の笑ひ声がどつとおこり、その病棟の全部にひびき渡つた」というように、笑ひがあふれている。心中し、女だけを死なせてしまったという事件の後の療養生活において、葉蔵や、小菅、飛驒は、「なんでもないこと」にでも大声たてて笑ひこける。そのことは、自責の念が薄いと大人たちの眉をひそめさせる。

それに対して、そのような大人たちとは違った目で、「道化」である青年たちを、とりわけ葉蔵を見つめる人物が登場する。それが真野である。「二十くらゐの看護婦」である真野は、いつでも一生懸命に葉蔵のことを思いやり、理解しようとする。葉蔵と真野がお互いに惹かれ合うという点については、既に指摘があるが、そのことと、次

で見るように、二人が対照的に書かれていることは関係があるのではないか。二人はそのために補完的に惹かれ合うものだと考えられる。また、次の章で述べるが、葉蔵の物語の結末を理解するためには、その点を捉えることが重要であると考ええる。

葉蔵は、「わざと真野のはうへ背をむけて寝てゐた」というように、しばしば、逆説的にそうと分かる形で真野に対する好意を示す。とりわけ、「葉蔵は怒つてでもあるやうに、だしぬけに口を挟んだ。女に愛情を感じたとき、わざとじやけんにしてやる古風さを、彼もやはり持つてゐるのであらう」という箇所がそうであらう。

次に、真野が、葉蔵の病室が騒がしいことを婦長から注意されたときのことであるが、婦長への「はらわたの煮えくりかへる思ひ」を「さびしく思ひ直して」「よい加減に茶化さう」とする葉蔵、飛驒、小菅の三人に対して、真野の反応は異なっていることが挙げられよう。彼女は「めくれあがつた上唇をことさらにきゆつと尖らせて」「率直」に怒りを表す。婦長は葉蔵らの「よいところ」がわから「ないのだ」ということや、また、「お氣になさらず、うんとおさわぎになつたはうが、ようございますわ。」「ほんたうに誰にだつてお叱られになつたことのない、よい育ちのかたばかりなのに。」とまで述べて、葉蔵たちへの好意を露わに示す。「片手を顔へあてて急にひくく泣き出し、」「泣きながら」出て行く。真野は三人の青年たちとは違い、「道化」という性質を持つてはいないが、葉蔵ら「道化」の青年たちの「よいところ」の分かる唯一の人物なのである。

率直に婦長への怒りを示す真野に対して、小菅は「にやにや笑」い

「自分の言葉に酔ってしまった」、また「やつぱり女だな」と述べる。飛驒もまた、「はじめから僕、変つてると思つてゐたんだよ。をかしいなあ。泣いて飛び出さうとするんだから、おどろいたよ。」と言ひ、真野の行動をからかっている。小菅と飛驒のこのような反応は、真野はやはり自分たち「道化」とは違ふと二人が感じていることを示しているのであらう。

また、葉蔵と過ぐす最後の夜、真野が「浮かれて」「ながなが」と、自分の「つましい家族のこと」や「立派な祖先のこと」について葉蔵に話す場面がある。真野は「やがておのれの眼のうへの傷について話だ」す。数日の付き合いでしかない葉蔵に対して、触れられたくない「傷」というプライベートなことを話すことが真野の好意の表れである。その際、「なにげなく語らうとしたらしかつたが、しくじ」つて、「声が喉へひつかまる」。つまり真野は、内心は平氣でなくてもそれを「不自然でなく言」え、「本音」を「笑ひ」で「ごまかす」ことのできる葉蔵とは異なるのである。

以上のように、葉蔵と真野は対照的であることを強調されつつ、お互いに好意を持っていることが示されている。ただし、このような二人の関係を、「かりそめの」⁽³⁾という限定つきであるにしる、「恋愛」⁽³⁾という言葉でのみ捉えるならば、見逃している点があるように思える。ことに、「結末で裏山の頂上に二人登つてカタルシスを迎える」⁽³⁾という点、二人の關係が暗示することが「男女間の素朴な相互了解による、対人關係の屈折からの救済の可能性」⁽³⁾であるという点については、再考が必要であると思われる。管見の限り、本作品において真

野が果たしている役割について、十分な言及がなされていないように思う。次章では、裏山に二人で登るといふ「道化の華」の結末について詳しく読んでいきたい。

二 結末における葉蔵と真野

葉蔵が退院する朝、「きつと」富士が見えるからと言つて、真野は葉蔵を裏山に誘う。富士を見せることで、退院する葉蔵を元気づけようとする心遣いであらう。真野は、何の屈託もなく、富士を見る価値のあるものとして肯定的に捉えており、このような誘いかけには、物事を疑わないという真つ直ぐな真野の性格が表れている。また、そのような善意の心遣いはもちろん、「赤い毛糸のシヨオルを顔がうづまるほどぐるぐる巻いて」や、また、「両手の指先へ白い息を吐きかけて温めつつ、はしるやうにして山路をのほつていった」というように、真野は可憐な女性として書かれており印象的である。

二人で山に登るこの場面では、葉蔵の真野に対する心遣いもうかがえる。「だれひとりゐない山」であり、真野に「わるい懸念を持たせたくない」と思つた葉蔵は、「たのしげに口笛を吹きこ」み、「軽症の患者さんたちが、はだかでここへ集る」といふ「白いテントの小屋」で真野が立ち止まった時には、彼女から「五六歩はなれて立ちどま」。また、これまでも、葉蔵は、真野と一緒にいる未来をすら思い浮かべることがあつた。前の章でも言及したが、葉蔵の病室が騒がしいことを婦長から注意される場面である。この時、葉蔵ら青年たちは「と

つさの間に、本気で退院の腹をきめ」るのだが、「殊にも葉蔵は、自動車に乗つて海浜づたひに遁走して行くはれしき四人のすがたをはるかに思つた」というように、真野を連れて療養院を出て行くことを夢想していたのである。

しかしながら、葉蔵と真野の明るい未来を暗示するかのような終わり方は、結局のところ、次のように慎重に退けられることになる。葉蔵の物語は、「結末で裏山の頂上に二人登つてカタルシスを迎える」③というようには終わらない。

「ぢや、僕のとこへ遊びに来たまへ。飛騨も小昔も毎日のやうに僕のとこへ来てゐるのだ。まさか牢屋でお正月を送るやうなこともあるまい。きつとうまく行くだらうと思ふよ。」

まだ見ぬ検事のすがすがしい笑ひ顔をさへ、胸に画いてゐたのである。

ここで結べたら！ 古い大家はこのやうなところで、意味ありげに結ぶ。しかし、葉蔵も僕も、おそらくは諸君も、このやうなごまかしの慰めに、もはや厭きてゐる。お正月も牢屋も検事も、僕たちにはどうでもよいことなのだ。僕たちはいつたい、検事のことなどをはじめから氣にかけてゐたのだらうか。

葉蔵は正月に東京に遊びに来るように真野を誘う。ここで葉蔵は、初めて率直に好意を示すのである。「きつとうまく行くだらう」とは、「牢屋でお正月を送る」ことを免れ、立ち直り再出発することも含ま

れるのであろうが、自分と真野のこれからの関係についても葉蔵の念頭にあるのではないか。というのも、葉蔵が、さらに書き手の「僕」までもが、「お正月も牢屋も検事も」「どうでもよい」と考えているからである。また、そこに「僕たちはいつたい、検事のことなどをはじめから氣にかけてゐたのだらうか」と反語形が続く。それでは葉蔵と書き手の「僕」が「氣にかけて」いることとは何かというところ、それはこれから二人がどうなるか、ということではないかと考えられる。同様に、「意味ありげに結ぶ」というのも、真野と葉蔵の二人が「うまく行く」ことを暗示した結びのことであろう。ここで、「ごまかしの慰め」であると退けられるのは、そのような結末である。

続きは、「僕たちはただ、山の頂上に行きついてみたいのだ」と書き進められる。山の頂上は、「そこに何がある。何があらう。」と、「それ」にのみ「いささかの期待」を「つないでゐる」という場所である。二人はそこに「たどりつく」。

「駄目。富士が見えないわ。」

真野は鼻さきをまつかにして叫んだ。

「この辺に、くつきり見えますのよ。」

東の曇つた空を指さした。

頂上にやつて来た葉蔵は、真野によって、富士の不在を告げられる。いつもは「くつきり」見えるはずの富士は見えない。真野は葉蔵に富士を見せて力づけようと一心に考えていたのだらう。落胆し、「鼻さ

きをまづかにして叫ぶが、それでも諦めきれず、一生懸命に東の空を指さす。しかし、葉蔵はあつさりと「いや、いいよ」と答える。頂上で何が見えるかということが唯一の「期待」であると述べられていたわりに、富士を見ることに拘らない。それは富士を見るために案内してくれた真野への気遣いかもしれないが、そうであっても、葉蔵が真野と一緒にその方を見て残念な様子を見せることはない。葉蔵と真野の思いは一致していない。

富士の代わりに葉蔵が眼にすることを選んだのは海である。葉蔵の物語は次のように終わる。

葉蔵は、はるかに海を見おろした。すぐ足もとから三十丈もの断崖になつてゐて、江の島が真下に小さく見えた。ふかい朝霧の奥底に、海水がゆらゆらうごいてゐた。

葉蔵の物語ははじまりと終わりがゆるく照応している。葉蔵の物語のはじまりは、「大庭葉蔵はベッドのうへに坐つて、沖を見てゐた」とあるように、葉蔵が海を見つめて独白する場面であった。そしてこのように、葉蔵が「すぐ足もと」の「三十丈もの断崖」から「はるかに海を見おろし」、「江の島が真下に小さく見え」るほどの高さであるにも拘わらず、「ゆらゆらうご」く「海水」の不気味な動きをはつきりと突きつけられることで終わる。

葉蔵の物語の結末では、葉蔵と真野の明るい未来への暗示が退けられ、富士にこだわる真野と、断崖の下の海を見つめる葉蔵という形で、

二人の対照性が再び強く印象づけられている。葉蔵が海を気にするのは、海が、葉蔵が死ぬために飛びこみ、園を失った場所だからだと考えられる。

その前夜、袂ヶ浦で心中があつた。一緒に身を投げたのに、男は、帰帆の漁船に引きあげられ、命をとりとめた。(…)あけがたになつて、女の死骸が袂ヶ浦の浪打際で発見された。短く刈りあげた髪がやつや光つて、顔は白くむくんでゐた。

葉蔵は「浪の音」が「耳につ」き、しばしば海に目をやり(4)、また、体調が回復してはじめに描くのも海である。

真野は軽くせきをした。「なにかお掛けいたしませうか。」

葉蔵は眼をつむつて答へた。

「僕か? いいよ。寝ぐるしいんだ。波の音が耳について。」

「僕にいちばんむくのはパトロンになることかも知れない。(…)芸術なんて、恥かしくなつた。」やはり頬杖ついて海を眺めながら、さう言ひ終へて、おのれの言葉の反応をしづかに待った。

「いつたい、どんなのを画いたの?」

葉蔵は頬杖ついたまま、硝子戸のそとの景色を顎でしゃくつた。「海を画いた。空と海がまつくろで、島だけが白いのだ。画い

てあるうちに、きざな気がして止した。趣向がだいいち素人くさいよ。」

風景描写でもしばしば海に言及され^⑤、次のように、書き手の「僕」も、特に海に注意を喚起する。

僕たちはそれより、浪の音や鷗の声に耳傾けよう。

以上のように、「海浜の療養院」を舞台とする葉蔵の物語では、冒頭と結末の他にも、しばしば海に注意が向けられており、それは葉蔵が園のことを気にかけているということであると考えられる。

「道化の華」は「そして、否、それだけのことである。」と結ばれる。海を見下ろす葉蔵が、園について、あるいは心中について、何かを想起したことは確かであるが、次で詳しく述べるように、葉蔵の心中についての思いは、結末に至っても述べられることがない。「それだけのことである。」とは、死のうとしたにもかかわらず、一人で生き残った「道化」の葉蔵は、真野に惹かれていて一緒にいることを思うが、真野と一緒にいることができず、「道化」として生きていくほかないということである。つまり葉蔵は、「道化」として、心中についてはぐらかし、ごまかしつつも、園を殺してしまったという事実を決して忘れることなく引き受けていくほかないことが、真野に導かれ海を見ることがよって、結末で示されているのである。

三 「道化の華」の「真実」

佐藤昭夫は、「道化の華」において、心中事件の内実は説明されておらず「空白」であると指摘した^⑥。たしかに、「道化の華」では、心中の動機が明らかにされたり、謝罪が述べられたりすることはない。たとえば、葉蔵が真野に対して心中した相手の女性である園について話す場面である。ここで葉蔵が話すのは、園が銀座のバーに勤めていたこと、そのバーには四度ほどしか行かなかつたこと、園のことを飛騨も小菅も知らなかったこと、園は「生活の苦のために」死に、二人は死ぬときまで、「お互ひにまつたくちがつたことを考へてあたらしい」ということ、「やつぱり好きだつた」から園と死のうとしたのではないかということ、葉蔵が左翼の仕事をしていたこと、さらに、「ほんたうは」「画をかきたい」ということである。葉蔵はそれらを、「くだらん話なんだよ」、「滑稽だ」という言葉で挟み、「笑つ」たりしながら真野に語る。さらに、ここでは書き手の「僕」が割って入り、「もう彼の言葉を信じてはいけない。彼等は、どうしてこんなに自分を語るのが下手なのだらう。」また「ああ、言へば言ふほどおのれが嘘つきで不正直な気がして来るこの大きな不幸」などと書くので、葉蔵の言葉をその通りには受け止めることができない。

大庭葉蔵の物語は、書き手の「僕」によって書かれているが、書き手の「僕」もまた、葉蔵と同様に「道化」の性質を持っている^⑦。以上のような箇所によく表れているように、本作品では、「道化」としてしか生きられない葉蔵の物語が、「道化」としてしか語れない「僕」

によって綴られるというように、二重の「道化」が示されているのである。

次に、葉蔵が心中の動機について小菅や飛驒に答える場面を見てみよう。

葉蔵は長い睫を伏せた。虚傲。懶惰。阿諛。狡猾。悪徳の巢。疲労。忿怒。殺意。我利我利。脆弱。欺瞞。病毒。ごたごたと彼の胸をゆすぶった。言つてしまはうかと思つた。わざとしよげかへつて眩いた。

「ほんたうは、僕にも判らないのだよ。なにもかも原因のやうな気がして。」

「判る。判る。」小菅は葉蔵の言葉の終らぬさきから首肯いた。

葉蔵は「わざとしよげかへつて」「なにもかも」が「原因のやうな気」がすると答えるのであるが、これは答えになつておらず、さらにその言葉の続きは、葉蔵と同様に「道化」であり、深刻な話になることを嫌う小菅によって遮られる。また、先の例と同様に、その後で書き手の「僕」が、「僕はもう何も言ふまい。言へば言ふほど、僕はなんにも言つてゐない。ほんたうに大切なことがらには、僕はまだちつとも触れてゐないやうな気がする。」などと言うことによつても、葉蔵の言葉は無条件に信じてできないものとされるのである。

また、「私も、できるだけことはするが、お前からも親爺へよい工合ひに手紙を出したはうがいい。お前たちは、のんきさうだが、し

かし、めんだうな事件だよ。」と言う葉蔵の兄が葉蔵に求めているのは謝罪や反省の言葉であらうが、「葉蔵は返事をしな」い。

以上のように、「道化の華」では、心中の動機や謝罪が書かれることはない。しかし、すでに考察したように、結末において、葉蔵は、園や心中という出来事について想起せざるを得ない海を見下ろす場所にたどり着くことになる。これは、「僕はこの手もて園を水に沈めた。」と高揚して述べられ、葉蔵が海を見つめることで始まる冒頭と同様に、結末においても園の存在が感じられるということである。冒頭の告白は単に口先だけのものではなく、結末と照応している。つまり、一人の女を死なせてしまった罪の大きさや恐ろしさは、直接的に書かれることはなくても、このような形をとつて「道化の華」に表れていると考えられる。

佐藤春夫が注意を喚起していた本作品の一節では、「道化」という有り方こそが、かえつて真実に触れ得ることが述べられていた。「道化の華」ならではの真実が読み取られるべきであり、それは次のように考えられるのではないだろうか。心中についての動機付けや謝罪は、心中に「義的な意味づけを行う行為であり、それでは心中を正しく受け止める——書き手の「僕」からすれば、心中について正しく書く——ことには決してなり得ない、との認識が、葉蔵や「僕」にあったのではないか。心中という出来事を、あるいは園の死を忘れずにきちんと受け止めるためには、「道化」という手法により、茶化しはぐらかし、結論を先延ばししていくしかないのではないか。逆説的な物言いになつてしまふが、心中に、これだと定義できる形の真実はないと

いうあり方こそ、「道化」である書き手の「僕」や葉蔵がたどり着いた真実だったのではないだろうか。佐藤春夫の言う「真実といふものはかういふ風にしか語れない」とは、以上のようなことを意味したものであったのではなからうか。

それでは、佐藤のいう、「真実の蛍光」とはどういうことなのか。それは真野のことではないかと考える。第一に、彼女は「ほたる」と呼ばれているからである。真野は、登場の際に、「左の眼蓋うへに、やや深い傷跡」があるため「片方の眼にくらべ、左の眼がすこし大きいのだが、「醜くな」と紹介されている。小菅が初めて彼女に会ったとき「不思議さうなおもちで真野の顔を覗いてゐた」というのは、その「傷跡」のせいであろう。真野は、その「おのれの眼のうへの傷」について、次のように葉蔵に話す。

「私が三つのとき、」なにげなく語らうとしたらしかったが、しくじった。声が喉へひつからまる。「ランプをひつくりかへして、やけどしたんですつて。ずるぶん、ひがんだものでございますのよ。小学校へあがつてゐたじぶんには、この傷、もつともつと大きかつたんですの。学校のお友だちは私を、ほたる、ほたる。」すこしとぎれた。「さう呼ぶんです。私、そのたんびに、きつとかたきを討たうと思ひましたわ。ええ、ほんたうにさう思つたわ。えらくならうと思ひましたの。」ひとりで笑ひだした。「をかしいですのねえ。えらくなれるもんですか。眼鏡かけませうかしら。

眼鏡かけたら、この傷がすこしかくれるんぢやないかしら。

真野は臉の上の傷のせいで「ほたる」と呼ばれていたのである。葉蔵にとつても、このように語られた真野のエピソードは印象深かつたのであろう。その話を聞いた後、真野を指して「ほたる」という言葉を使う箇所がある。

葉蔵は沸きかへる思ひに堪へかねた。真野のはうへ寝がへりを打たうとして、長いからだをくねらせたら、はげしい声を耳もとへささやかれた。

やめろ！ ほたるの信頼を裏切るな。

「ほたるの信頼」とはどのようなことであろう。小菅が葉蔵の病室に泊まることが一晩だけあるが、その時のみ、真野は小菅を用心して屏風を持ち込み、「葉蔵の足の真下あたり」に作つた寝所をそれで囲っている。これは葉蔵に対して特別な信頼がある証拠である。

真野が作中で果たす役割については、葉蔵が彼女によつて園の死んだ海に導かれるということを確認した。真野は、結末の他にも、葉蔵が園の死、すなわち心中について思ひ出すきっかけを与えている。真野が小菅にせがまれ、自らの経験した「怪談」を語る場面について見てみよう。

真野が看護婦になりたての、十九の夏のできごと。やはり女の

ことで自殺を謀った青年が、発見されて、ある病院に收容され、それへ真野が附添った。患者は薬品をもちゐるのであつた。からだいちめんに、紫色の斑点がちらばつてゐた。助かる見込がなかつたのである。夕方いちど、意識を恢復した。そのとき患者は、窓のそとの石垣を伝つてあそんでゐるたぐさんの小さい磯蟹を見て、きれいだなあ、と言つた。その辺の蟹は生きながらに甲羅が赤いのである。なほつたら捕つて家へ持つて行くのだ、と言ひ残してまた意識をうしなつた。その夜、患者は洗面器へ二杯、吐きものをして死んだ。国元から身うちものが来るまで、真野はその病室に青年とふたりであつた。一時間ほどは、がまんして病室のすみの椅子に座つてゐた。うしろに幽かな物音を聞いた。じつとしてゐると、また聞えた。こんどは、はつきり聞えた。足音らしいのである。思ひ切つて振りむくと、すぐうしろに赤い小さな蟹がゐた。真野はそれを見つめつつ、泣きだした。

「女のことで自殺を謀った青年」が亡くなつたあと、彼と二人きりでいた真野は、「足音らしい」「幽かな物音」を聞く。振り返ると、彼が「きれいだなあ」と言つた「赤い小さな蟹」が「すぐうしろに」いたという。つまり、死んだ青年の魂が蟹になつた、という怪談である。この話をきっかけとして、葉蔵は「園の幽霊を思つてゐた」とあるように、園のことを想起するのである。

葉蔵の物語では、直接的に園について語られることはないのだが、真野をきっかけとして、葉蔵は園のことを決して忘れられないという

ことが示されている。すなわち、佐藤春夫のいう「真実の蛍光」とは、「はたる」と呼ばれている真野によつて、葉蔵が園を想起するきっかけを与えられ、結末で心中の舞台である海に帰ってくる、という意味ではないだろうか。

彼女の名前に「真」の一字が与えられていることもまた注目に値しよう。真野は、「道化」である葉蔵を、実は「真面目」であると捉えるただ一人の人物である。葉蔵の心中の動機について、それを、夫のある女性に恋をしたせいだという飛驒や、マルキシズムからの挫折だという小菅とは違い、真野は「思想でもない、恋愛でもない、それより一步てまへの原因」を考える。この「一步てまへの原因」とは、恋愛や思想といった具体的な問題ではなく、葉蔵の性質が真摯であるということであろう。真野は、「立派な画をかきたいつて、しよつちゅうおつしやつて居られますの」、「真面目なんですのよ。真面目でございますから、真面目でございますからお苦しいこともおこるわけね」と、葉蔵について「耳まで赤くし」て他の患者に話していた。

真野は、佐藤春夫が「キイノート」として指摘した、「なにひとつ真実を言はぬ。けれども、しばらく聞いてゐるうちに思はぬ拾ひものをすることがある。彼らの気取つた言葉のなかに、ときどきぴつくりするほど素直なひびきの感ぜられることがある。」という一節の通りに、「道化」の葉蔵の「真実」を見抜き、読者に伝える、極めて役割の大きな存在であるといえるだろう。

結論

本稿では、佐藤春夫の「道化の華」評が促していると考えられる読み方にしたがって、作品を読むことを試みた。佐藤は本作品の一節を抜き出して、「キイノート」であると指摘する。これは常に「本音」を「笑ひでごまか」す「道化」である葉蔵のありようこそが、かえって真実に触れ得ていることを指摘したものであると考えられよう。

次に、葉蔵を看護する真野という人物に焦点を当てた。真野は、葉蔵とは対照的に「非・道化」的な人物として造形されており、葉蔵と真野の二人は、いわば足りないものを埋め合うように惹かれていく。しかしこの二人の明るい未来への予感、書き手の「僕」によって慎重に退けられ、結末においても富士にこだわる真野と、断崖の下の海を見つめる葉蔵という形で、二人の対照性は再び強く印象づけられる。そして「道化の華」は「それだけのことである」と結ばれる。つまり、葉蔵は「道化」として生きていくほかないのであり、はぐらかし、ごまかしつつも、園を殺してしまったという事実を決して忘れることなく引き受けていくほかないことが示されているわけである。

本作品で葉蔵の心中の動機や謝罪が描かれることはない。これまでそうした点が不誠実であると非難される理由にもなってきた。しかし、動機付けや謝罪は、心中という出来事に一義的な意味を与える行為であり、それでは心中を正しく受け止める——書き手の「僕」からすれば、心中を正しく書く——ことには決してなり得ないだろう。心中を、あるいは園の死をきちんと受け止めるためには、「道化」とい

う手法により、茶化しはぐらかし、結論を先延ばししていくしかないのではない。逆説的な物言いになってしまいが、心中に、これだと定義でき答えられるような真実はないというあり方こそ、「道化」である「僕」や葉蔵がたどり着いた真実だったのである。佐藤の言う「真実」といふものはかういふ風にしか語れない」とは、以上のようなことを意味したものであったのであろう。

そして、葉蔵に繰り返し園の死、すなわち心中を思い出せるきっかけを与えるのが「ほたる」のあだ名を持つ真野であり、彼女の名前に「真」の一字が与えられていることは注目に値しよう。真野はまた「道化」である葉蔵を、真面目で真摯であると捉えるただ一人の人物である。佐藤春夫が「道化の華」において、「ほのかにあはれる真実の蛍光を発するを喜びます。」と述べたのは、本作品において真野が果たす役割のことであつたと考えられる。

注

- (1) 引用は、関井光男「解題」(『太宰治全集第二巻』、筑摩書房、一九九八年五月)に拠る。
- (2) 拙論「太宰治『道化の華』論」(『國語國文』、二〇〇七年十二月)。
- (3) 中村三春「メタフィクションの真実——『道化の華』の自己言及構造」「フィクションの機構」(ひつじ書房、一九九四年五月)。
- (4) 葉蔵だけではなく、他の登場人物もまた、しばしば海を眺める。「二十くらゐの看護婦がひとり付き添つてゐた。(…)ベッドの傍の椅子に坐り、曇天のしたの海を眺めてゐるのである。」、「飛驒はぶらぶら歩きだ

し、葉蔵の枕元のはうへやつて来た。硝子戸に鼻先をくつつけるやうにして、曇天のしたの海を眺めた。「こんなことを申しあげると失礼でせうけれど、これからはほんたうに御勉強なさるやうに。」／ 院長はさう言つて、はにかんだやうな眼を海へむけた。」など。

(5) 「翌る朝は、なごやかに晴れてゐた。海は風いで、大島の噴火のけむりが、水平線の上に白くたちのぼつてゐた。」「海には霧がいつぱい立ちこめ、その霧の奥のあちこちから漁船の発動機の音が聞えた。」など。

(6) 「『道化の華』の第二の特色について。それは葉蔵の物語の発端である心中事件が、ほとんど手をつけれぬまま、奇妙な空白を形造つてゐる点である。」(佐藤昭夫「□作品論□ 道化の華——〈僕〉の位置をめぐって」『国文学解釈と教材の研究』十二・十四、一九六七年十一月。) (7) で論じたが、書き手の「僕」が「道化」であることは、冒頭によく表れている。「この手もて團を水に沈めた」という大仰な罪の告白を、「やれやれ、大仰きはまつたり」と茶化すことで「僕」は登場するのである。

付記 引用は、『太宰治全集第一巻』(筑摩書房、一九八九年六月)に拠つた。引用に際して、旧漢字を新漢字に改めた。